



回福丸綺譚

[SFP0314]

Sudden Fiction Project

高階經啓

hirotakashina

三日目の朝、朝食を終えて食堂を出て部屋に戻る。そうそうこれで最後だったと薬の包みをポケットに入れて、仕事の道具をカバンにおさめ、出勤する。出勤たって会社があるわけじゃない。ホテルを出て左手に向かう。こっちの方はまだお邪魔していない。未踏の地だ。手を突っ込んだポケットに薬を見つける。いけねえ忘れるところだった。

「そいつは罌だ！ 気をつけろ」

出し抜けに罌だなんて言われても何がどう罌だかわからない。だいたいどこのどいつだ馴れ馴れしい。振り向いてあたりを見回すが朝まだ早いビジネス街には人気がない。空耳ってことはないだろうが、おれには関係なかったんだろう。ぽんと錠剤を口に放り込むとペットボトルの水で飲み下し、ぶらぶらと歩いて行く。さて今度のカモはどこにいらっしゃるかな。

いい町を見つけたものだ。おれは自分の運の良さを八百万の神に感謝する。この町の神様に。このメインストリートの神様に。おれが泊まったホテルの神様に。おれをこの駅まで運んだ鉄道の神様に。そのきっかけをつくってくれたあのがきんちょに。あの列車の中のがきんちょがこの駅の名前を何度も連呼しなければ（「岩内って言わない！ 岩内って言わない！」と五万回くらい言った）、おれがこの駅を意識することはなかったろう。そういう意味ではあのがきんちょが今回の最大の神様だ。

町のサイズは仕事にぴったり。これより小さいと宿泊しての仕事なんてとんでもないことになる。たちまち住人たちに余所者として目をつけられてしまうので、その日のうちに仕事を終えずらからなければならぬ。そんなの鉄道の運賃にだってなりやしない。おまんまの食い上げだ。それに小さな村落ではたいした身入りは見込めない。よっぽどのお大尽でなければ肝心のおあしを持っておいででない。仕事にならない。

それがどうだ。この町じゃ初日からうはうはだ。飛び込みセールスを装ってぶらりと立ち寄った町工場の社長はおれの話聞くうちに涙を流さんばかりに喜んで、ぜひ契約して欲しい、前金は二百万しか用意できないがこれで何とかしてくれなんて、頼んでもいないので現金二百万円をおれに預けてくれた。おかげで見せ金のできたのでそれからの仕事がどんどんやりやすくなってきた。あの工場主も神様だな。

会社やら店舗やらを四、五軒回るうち、気がついたら五百万を超える金を手に入れていた。妙なものでこうなるとこっちがうっかりこの金をなくしちまわないように気が気でなくなって来る。のんびりランチでもいただくというのでぶらっと入った喫茶店で、妙に馴れ馴れしく話しかけてきた女子校生を適当にあしらっていたら、その女子校生までもが即金で十万という金を懐か

ら出してくれた。おれの仕事に共感したので出資してもいいかというのだ。もちろん口からでまかせの仕事の方にだがな。

一晩ホテルに泊まって地元のうまい酒や肴に舌鼓を打って、温泉に入ってぐっすり眠って二日目も朝からとれたての海産物の朝食をいただいて表に出る。朝食後には一日一回と決めた食後の錠剤を口に放り込む。思えばこれが幸運の呼び水だった。

前の町はさんざんだった。前の前の町もさんざんだったが、輪をかけてさんざんだった。「井伊」だなんて名前だからきつといい町に違いないと立ち寄ったが、思いの外にしょぼくっていて、カモはいない、宿は雨漏り、飯も酒もまずい上に高い。足を挫くやら頭をぶつけるやらでさんざんだったので目についた神社にお参りに行った。これでなかなか信心深いんだ。社務所で仕入れたのがこの錠剤、回福丸だ。毎朝一錠ずつ、心をこめて願を掛ながら三日続けて飲めばめでたうことが繰り返すてえ、ありがたい霊薬だ。

二日目訪れたオフィス街も太っ腹な会社だらけで、特に役所の外郭団体なんてところは金を持っているところ見せたいのか一千万くらい出そうとするので、こっちからそんなに要りませんと半額にする始末。でもおかげでますます信用が高まって、その関連団体からの問い合わせに応じるうち、この日だけで結局一千万を超える現金を手に入れた。

さあこうなると、二千万に迫ろうかという現金の扱いが面倒になる。ホテルの部屋に置きっぱなしにするわけにもいかず、さりとして持ち歩くのもけんのんだ。見せ金に三百万程カバンに入れるがそれでも一千飛んで五百万は残ってしまいう。苦肉の策で腹巻きに巻いて出てきたのが今朝だ。

後ろからどんと突き当たるやつがいて思わずよろめく。面白いように身体がぐるりっと回ってきれいに一周して地面を踏みしめる。あわててカバンと腹巻きを改めるが大丈夫。すられたわけじゃない。「おう、気をつけな！」と声をかけると、突き当たったやつがこっちを振り向いてニヤリと笑う。見覚えがあると思ったら列車の中で「岩内って言わない！」と叫んでいたがきんちよだ。何だ、あいつ、この町の子だったのかとあたりを見回すと、どうもおかしい。

いつの間にか神社の境内にいて、見ると向こうからおれが歩いて来る。どうした、いったいこれは何だと思っていると、おれと来たら神妙な顔しやがって賽銭箱になけなしの銀貨を一枚投げ込んで、がらんがらんと鈴を鳴らし、二拝二拍一拝してなにやらお願いをしている。これは三日前のおれだ。てくてく社務所に行って薬を買い込んでぽんと口に放り込む。するととたんに元気が出てきたようですいすいと駅に向かう。

面白いんでついて行くと、なるほどここは井伊の駅。こっそり同じ電車に乗り合わせるとあのきんちよも乗って来る。わあわあ騒ぐのを聞くのも前回の繰り返し。岩内で降りて一日でがっ

ぼり儲けているさま、二日目に団体職員にかしずかれて調子に乗るさまを見るうち、妙なことに気がつく。おれが行く先々であのがきんちょがうろうろしているのだ。

三日目の朝に、財布に入れた金がなくなって、カバンの見せ金を見て仰天する。みんな新聞紙にすり替わっている。腹巻きの中の金も同じ。それでわかった。あれはみんながきんちょが持って行って、おれに先回りして配って歩いたに違いない。これじゃ堂々巡りだ。二千万近い金があったってぐるぐる回ってるだけじゃ仕方がない。これはどうもとんだことになったと表に出る。間もなくこの町について三日目のおれもホテルから出てくる頃だ。

ふっと傍らを見るとパン屋があって「いわないベーカリー」なんぞと書いてあるのが目につく。そこでおれは気がついた。ホテルからおれが出て来る。薬を飲もうとしている。あれだ。あの薬がおかしいんだ。「そいつは罠だ！ 気をつけろ」叫ぶが聞きやしねえことは百も承知。追いついて事情を話さなきゃと後ろから追いかけて行く。もうじき肩に手をかけるって時に、数日前に挫いた足がもつれて、おれのことを突き飛ばす。突き飛ばされたおれは面白いようにぐるりと回って、目の前で消えた。ああ、あいつ、神社に戻っちゃった。

途方に暮れてあたりを見回す。二千万の金はどこかに消えて、おれのカバンと腹巻きは新聞紙だらけ。これじゃあ来た時より始末が悪い。しょうがないのでパン屋で朝食を買う。レシートを見ながら、こんな町、早々に出て行こうと決意する。こりゃあ最初から何から何まで罠だったんだな。ご丁寧なこって、「いわない」って地名は、「いい」の中に「わな」が入ってやがる。

(「罠」 ordered by atohchie-san/text by TAKASHINA, Tsunehiro a.k.a.hiro)

新作スタート。お題募集中。

2011年10月1日。

Sudden Fiction Projectの新作発表が始まりました。

1日1篇ペースをめざしていますが、これはどうなるかわかりません。
毎日、その日のお題を見て、いきなり書き始めていきなり書き終わる。
即興的に書くSudden Fictionをこれからお楽しみください。

お題募集中です。

「[急募！お題](#)」のコメント欄で受け付けています。

(お題の管理上、TwitterやFacebookでは見逃しがちなので、
どうか上記コメント欄をご利用ください)

それではこれからしばらく新作のシーズンをお楽しみください。

回福丸綺譚

<http://p.booklog.jp/book/35624>

著者 : hirotakashina

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/hirotakashina/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/35624>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/35624>

公開中のSudden Fiction Project作品一覧

<http://p.booklog.jp/users/hirotakashina>

電子書籍プラットフォーム : ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社paperboy&co.